

母を看取った娘

え様の語り

父を、私と母で病院で看取ったことがある。その経験から母は自宅での看取りを希望していた。病院にいるのが嫌いで、初めから病院に抵抗があった。食えることができなくなって救急病院に行った時、点滴をしたら「少し元気にはなるけど、治るものではない。しかも病院では入院はさせられない、一日二日考える間は入院させられるけれど、治る病気ではないのでどこかの病院か施設に移ってもらうことになる」と言われた。元気なときから施設は入りたくないと言っていたので最期まで自分で看ようと考えた。

以前の家には私と母が暮らしていたが、母が杖をついているときに怪我をして入院したので、その間にバリアフリーにリフォームした。しかしリハビリの結果がよく、結局杖もいらぬ状態になり、認知症が進んで徘徊を始めた。そのため次男が皆で一緒に住もうと言ってくれて、ここに二世帯で介護をしやすい家を建てて引っ越した。その経緯があって、救急病院で死を待つことしかできないと言われて、この家での看取りを決めた。

以前、介護認定2を受けたときに、包括支援センターと繋がっていたが、サービスは全く使わなかったため認定が切れていた。

病院からは何の情報もないまま家に連れて帰ってきたが、ご飯を食べない状態だったので、母がどうしてほしいのかわからず、どうしてあげたらいいのかわからないと困り包括ケアセンターに、自宅での介護が「こわくなった」と、電話をした。主治医もいなかったため、介護保険でも医療でも介入できるようにと、ケアマネージャーさんが早速調査に入っ

てくれた。母のような終末期の場合は審査を急いでくれるということだった。もし認定が間に合わなくても医療保険で大丈夫とその日の十一日から訪問看護が入ってくれた。認定は要介護度四で、毎日訪問看護が入り、なくなったのは16日である。

亡くなる一月前に温泉に行った時は、元気でたくさん食べたため、もっと長生きするのだと思っていた。自然死は本当に突然だった。痛みに関しては腰痛があっただけで、あまり苦しまずに家族の生活の音を聞きながら自然になくなった。

事前に看取りに関するガイドブックのようなものはどこからももらわず、訪問看護師や医師が情報を提供してくれた。家族の対応の仕方に関しては、看護師が指示することになっていたが、二十四時間の緊急加算がついているため、家族は本当に何もすることがなかった。また何か分からないことがあったら電話をいつでもかけて下さい、と言ってもらえていたので、心強かった。連絡も密で、情報の申し送りも丁寧だった。一日一回訪問してくれたが、保険の上限枠からはみ出ないようにケアプランを立ててくれた。

とにかく病院が嫌いな母だった。入院していたときは、毎日病院に呼び出された。この点は、在宅のほうが気軽であった。義理の母は主人の兄が自宅で看取った。主人は次男で既に亡くなっている。兄もいるが、兄嫁と母は合わないもので、自分が母は看取ろうと決めていた。特に母とその点について特に話し合ったことはないが、一緒に当たり前だと思っていたのかも。兄からは自分は何も口出ししないからと言われた。実は、施設に入れて同居はやめたほうがいいと言われてもいた。嫁も、一緒に住むことに關しては、本音はいやだと言われたが、息子に諭され、最後は一緒に住みたいと言ってくれた。こういう家庭だから看取りができたし、母を看る事をつらいとは思わなかった。全く外出できない状態が何年間もあり、徘徊のため交番のお巡りさんにお世話にもなった。玄関の内側から出られないように鍵を付

け、私がいる時でも鍵はかけておいた。デイケアは一日しか行かなかった。娘と一緒に行くが一人では行かないという出たからである。母の傍を離れられなかった。常に一緒だった。一人で出かけるときは、帰るまで家政婦さんにいてもらえるようお願いした。一日家政婦さんを雇うと一万四千円くらいかかるので、昼だけお願いして、その間に銀行などに行っていたりした。看取りのときは、毎日ではないが少しは来ていただいた。気がかりなことは孫が祖母の病気を理解できていないことぐらいだった。

最期は、母の足がベッドから出ていて、足を布団の中に戻した際になんか変だなと感じて、気付いたら亡くなっていた。看護の方に電話をし、その方が先生に電話をしてくれた。先生からはそろそろだと言われていた。母と普通に話していたため、信じられなかったが、母は苦しまずに亡くなったと思う。亡くなった後の顔が綺麗だったから。

死亡時刻は、その場で先生が確認した時間だった。孫たちには朝起きてきた際に合わせた。

これまで自分の時は施設でいいと言っていたが、母の看取りの経験後は、自分もここで看取ってもらいたいと思うようになった。